



浄土真宗西福寺別院 熟柿庵
令和七年重十月 第四百四十一号

ようやく秋の気配になってきました。そして気分も少し和らいでまいりました。数年ぶりに脂ののったサンマを見つけ塩焼きにして、山盛りの大根おろしを添えて冷酒で一杯やりました。今年の過酷な暑さをなんとか乗り切れたことへのささやかなご褒美でしょうか。

二つの人生の見方

人生には二つの見方があります。恩師だった武田寛弘先生は、『歎異抄講義録』たんにしょうの冒頭で、次のように述べておられます。

「人の生き方というものを考えてみますと、二つの見方があります。一つは生きていくという事実、生きていくということは、本当は自分じゃ全然わかっていないのです。もう一つは、生まれてきてそして次々といういろいろなことが頭の中に入ってきて知識としていろいろなことを覚えて、私はこういう者だと考えられる自分という者です。」

ふつう私たちは自分で考え、次から次へといろいろなことを勉強し、さらにそれを経験し学んで、それが自分であると思っているわけです。他人とはちがって自分はこういう個性をもった人間ですと言っている。それが私という者のすべてだと考えている見方です。これが二つめの見方です。しかし、その自分というのは意識のなかで作られた自分です。私の命が生まれてきたというけれど、それは自分の意識とは全然関係のないことなんです。

意識というのは、私が生まれた後から出てきたもので。生まれたきたそのこと自体は自分の意識では測り知ることができないんです。さらに、たった今生きているということも自分の意識とは全然別なんです。

生きていくということは、自分で考えていないのに心臓は動くし、自分で考えてもいないのに呼吸もするし、悪い菌が体に入ればちゃんと排除してくれる。自然に命を保っているという事実は、私たちの意識とは別なんです。この根っこで命を保っているものと意識で分別している「私」というもの、この二つをひっきりめて私と言っているわけです。

しかし普段「私」と言っている時には、この根っこで命を保っているものについてほとんど考えてはいません。自分の論理・理屈が我執となって、それを元にして「私」と言っているだけなのです。しかし根っここの命はそんなちっぽけなものではありません。無限の命なんです。地球始まって以来、宇宙始まって

以来の無限の彼方から一つの大きな法としてある命なんです。

その命を今私たちは生きているわけですが、でも現実に私たちが生きていると考えているのは有限の世界ですよね。生まれてきたその後から始まった意識にしたがって分別し、自分の好みにあわせて善悪、好き嫌いを決めていく。そういう人間の分別の世界に生きているわけです。ところが生きている本体は、無限の道理のなかに生きているのです。そこにどうしようもないギャップが出てきます。」

少し長い引用でしたが、先生の仏教に対する捉え方がうかがえます。

この二つの命のありようを、少し乱暴ですが、「無我」の命と「自我」の命と言い換えてみます。

「無我」の命

自分の考えをはずして、言わば仏様の目で世界を見ると、まず全ての命は「平等」なのです。人間の命も動物の命も同じなのです。動物や野菜の命を食べるということは本当はとも残酷なことですが。また「時間」についても、私たちは普段に、時間は過去、現在、未来と流れていると思ひ込んでいますが、これも「無我」の世界では、而今（にこん、酒の銘柄ではありません）、たった今しかないのだ、と説いています。また「無分別」と言うことも語っています。私たちは例えば「山は山、川は川」「彼は彼、私は私」と分別していますが、本当はそんな区別は存在しません。聖徳太子はそのことを「世間はすべて嘘っぱち」と語っておられます。

私は、仏教をとおして、私の思いをはるかに超えたこの「無我」の世界を学んできたのですが、少々疲れてきました。自分の限られた考えで無限の世界を理解しようとしてきたのですから、まるでずっと背伸びしているようで、疲れます。

「自我」の命

いくら妄想だと言われても、「無我」の世界が真実だと言われても、それを考えているのはこの私なのですから、私が生きているという思いは、認知症でない限り死ぬまで消えません。世界を見ているのはこの私なのだし、努力して人生を送っているのも私なのです。病気になるのは嫌だし、健康であることを願っているのも私なのです。眠っている時以外、常に私を中心にして物事を考えているのです。そして私の人生が幸福であることを願って常に生きているのです。願っていないがら、どうしようもない理不尽な出来事が次から次へと起こってくるこの人生。先生はそれを「ギャップ」とおっしゃっています。

無我と自我

この「無我」の真実の世界を、「自我」を生きている私がどんなふうを受け止めればよいのかを考えております。親鸞聖人は「自我」の私を「罪悪深重、煩惱熾盛」と言って、罪深く欲深いどうしようもない存在であると語っておられます。

昔、ある女性にこの言葉を話したら、「厳しすぎる反省で、自殺したくなりそう」と言っておられました。私の説明が足りませんでした。

今、私はこの「無我」の世界を、面と向かい合って対峙するのではなく、背中で風を感じるように、受け止めて生きていければ良いのかなと思っております。

いよだかねあき 伊与田兼明さん追悼

九月半ば。江戸川区の正見寺住職、伊与田兼明さんが還浄（げんじょう）されました。享年七十九。追悼できるほどには、まだ心は冷静ではありませんが、思い出すままに彼について語ります。

彼とは、武田寛弘先生を通じて「求道会」で知り合いました。「求道会」は、昭和前期を、漂泊の詩人として生きられた星野清蔵氏のお弟子さんたちが作られた、歴史ある会です。私にとっても、五十年以上のご縁を頂いたこの上ない大切な会でした。

勉強会では、曾我量深氏や『大乘起信論』『成唯識論』などをテキストに学んでまいりました。

当時の私は若さゆえの浅学もあって、ただ仏教の言葉が、小さな夜空の星くずのように意味なく散らばっているだけでした。しかし会を重ねるにしたがって、その星くずが一つ一つ次第につながれていって、自分なりの星座が作られるようになっていき、それがとても喜びでもありました。「求道会」はそんなふうに私の生きる支えになってくれました。勉強会の後の呑み会も含めて、かけがえのない時間でした。そして、その会にはいつもにこやかな伊与田さんがおられました。

私は今も枕元にラジカセを置いて、「古今亭しん生」の落語を子守歌がわりに聞いております。これは二十代の頃、伊与田さん宅に泊めていただいたとき、枕を並べて聴かせて頂いたしん生さんの落語のお陰です。二人してニヤニヤして聞きながら眠りついたことが今も忘れられません。

武田寛弘先生は、生前、「いくら仏教の勉強をしても、温かい心をもつてないと、意味がないですよ」とおっしゃっていました。先生は、温かい心をもった人としてきつと伊与田さんのことを思っておられたのだろうと確信しております。

かなしみの季節

仏教には「四苦八苦」という言葉があって、その中の一つに「愛別離苦」（愛する人あいべつりくと別れるという苦しみ）があります。長年親しくご縁をいただいて、そして別れの時がくる。それはまるで心の半分が解け落ちるような辛い気持ちです。そうしたことがここ数年増えてきました。人生の別れの季節の真ただ中を生きているのかもしれない。とても辛いことですが、これも人生の中の大切な季節です。長く生きていれば味わわな

ければならない大切な季節です。

伊与田さん、ありがとうございました。

【お知らせ】

築地本願寺での合同法要のご案内

十一月二十二日（土曜日）昼十二時から、築地本願寺の「東日本間」にて合同法要を行います。ご縁ある方のお参りをお待ち申し上げます。

集合場所は、いつものように築地本願寺本堂内の右わきです。

なお、年度当初にお便りにてご案内いたしました日時、「十二月六日正午」は変更になりましたのでご注意ください。

今月のことば

生きるとは 悲しみを生きること

そして

悲しみは生きるちからになります

熟柿庵 東京都荒川区東日暮里五―九―四

電話 0三―五六〇四―二三三四

ホームページ [http:// www. jyukushian.com](http://www.jyukushian.com)